

# 国際基督教大学高等学校

## 平成30年度スーパーグローバルハイスクール

### 研究報告書

#### 【研究開発の仮説】

国際性や多様性に富む学校生活を通じて、生徒達はグローバル課題への高い問題意識を持っている。これらの生徒が、国際社会で活躍する人物や団体の活動に触れ、世界各国の同世代との交流体験の機会を得て、国際基督教大学教授陣の指導の下に課題研究を行うことにより、実践的な問題解決能力を持ったグローバルリーダーとして育成されるという仮説に立ち、本研究を実施する。

本校には、すでに海外経験をもつ帰国生徒と国内一般生徒が2対1の割合で在籍する。特に海外体験の少ない国内一般生徒も、本事業を通じてグローバル課題に関心を深め、帰国生徒の体験を共有しながら、共にグローバルリーダーに相応しい知的能力と実行力を身につけるように導きたい。

#### 【平成30年度研究開発の成果と課題】

指定第5年次にあたる今年度の成果と課題は以下のとおりである。

### 1. 課題研究講座の準備をするための全校的取り組み〔資料 p.1～〕

#### (1) SGH 講演会

研究開発単位のひとつであるA「国際基督教大学教員による授業（リベラルアーツ教育への導入）」については、SGH講演会として学期はじめ・学期末に各学年を対象にのべ7回実施した。SGH事業以前にはこのような講演会はあまり行なっていなかったが、この5年間のSGHで学年の恒例行事としてすっかり定着した。全校規模では講演者と生徒との対話的な関係が構築できないと考え、学年別に実施しているものである。

国際基督教大学特別招聘教授で元国連大使の吉川元偉教授による講演のほか、高大連携協定を締結している東京外国語大学などからも講師を迎えている。

#### 【評価】

講演後の質疑応答も活発であり、生徒感想文でのふりかえりの深まりも見られる。学年末SGHアンケートでも高評価である。

生徒感想文では、「偏見を持つことで、言葉が通じる相手ならともかく、言語の異なる相手では認識の違いが生まれてもその認識を改めることが難しくなる。この話を聞いて、偏見を疑うこ

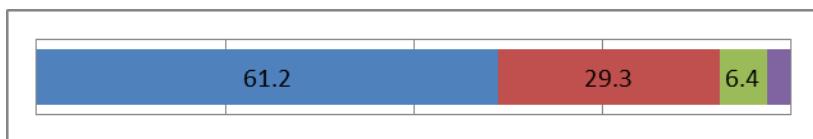
との重要性を感じた。ミリアムさんのような方が実際に講演して下さることでそのチャンスを得れると思いました。」、「一つの物事を多方面から見ることの大切さを知りました。一番被害を受けている人たちが、知識のなさゆえに加害者といっしょくたに扱われたり、イメージだけで決める付けることの危険性をすごく感じました。」、「継続的な支援をするためには、その国の経済状況や需要に応じて、どのくらい、何を渡す、または貸すのかを具体的に決めなければいけないということを実際に聞き、国際協力の現場に立つ人は語学力だけでなく、その国への深い理解と真摯な態度が必要なのだと改めて思った。同時に、外交官という仕事にすごく魅力を感じた。」

「世界の問題は他人事ではなく、私の未来にもつながっているのだと思いました。日本が教育以外の目標が全く達成できていないことに驚きました。ジェンダー問題や男女の所得格差など目に見えない問題についても考えていくべきだと思いました。」などグローバル社会と関わるうえで必要な態度変容を示すものが多くみられた。グローバルリーダーとして活躍する内外の専門家らの講演を重ねることで、グローバルリーダーとして必要な資質への気づきが着実に育ちつつある。

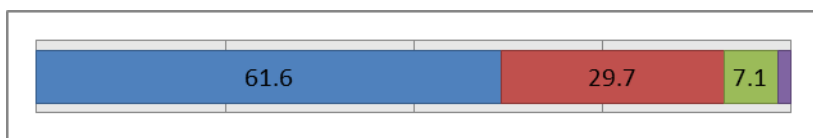
### 【学年末 SGH アンケート集計結果（全学年）】

※学年末アンケートは、平成 30 年 11 月に全校生徒を対象に WEB 実施（580 名回答）。

「スーパーグローバルハイスクールの企画、行事は自分にとって意味があると思う」  
 そう思う 61.2%+ややそう思う 29.3%=90.5%



「本校には世界に目を向け考えることのできる機会やプログラムがある」  
 そう思う 61.6%+ややそう思う 29.7%=91.3%



## （2）外国語教育

外国語科は、学問的スキルとしての外国語教育の実践を深めている。第 2 学年英語授業において、AP カリキュラム（AP Literature and Composition）を実施している。今年度は 16 名の生徒が選択、履修した。加えて、1 年生 EWW 個人プレゼンテーション「What the world needs –individual TED talks- いま、世界に必要なもの」、1 年生 ELA 「Global Issues Poster presentation」、2 年生 ELA 「PECHAKUCHA presentations with Chromebooks」、高い英語力を持つ帰国生徒中心の「Globe Cinema：グローブ・シネマ」（3 年生）、国内一般生中心の「ニューヨークの高校生とのブログの画像を通じた交流」（1 年生）などの取り組みの工夫をしている。さらに、学年度末の外国語授業では、多くの生徒がプレゼンテーションを行っている。このように、外国語科では各自の英語レベルに応じた有意義な学習プログラムが提供されるよう、カリキュラムを年々整備している。

### 【評価】

各教員が自主的にグローバル化する世界に対応できるスキルや人間を育成するための授業計画を提案するような雰囲気が教員間に生まれていることに加えて、それらを教科教育共通のスキルとして共有しようという機運が高まってきている。外国語科専任教員による教科会議に副校長や教頭が陪席するなどして、教科に対する支援を強めている。他方、生徒らもグローバル化する世界において必須のスキルである英語を使いつつ、学ぶ楽しみやチャレンジを日々味わっている。

なお、この点は中間評価における指摘「学校内での取組や通常の授業との連携などについて改善が望まれる」に対する改善取組であることを付言する。

### 【TOEFL ITP テストの実施】

平成 27 年度以来、毎年高校 1 年生を全員を対象に実施している。今年度は、7 月 5 日に受験させた。生徒にはこの結果に自信を持って、さらに高い目標をめざす励みにさせたい。

※ L 1 は帰国生のトップクラス、L 4 は国内一般生の多いクラス

#### 今回のテスト結果

L 1 生徒 (50 名) の平均	5 8 7 . 3 点
L 2 生徒 (49 名) の平均	5 4 0 . 6 点
L 3 生徒 (52 名) の平均	4 7 4 . 0 点
L 4 Adv.生徒 (37 名) の平均	4 4 0 . 8 点
L 4 Gen 生徒 (68 名) の平均	4 0 9 . 3 点

TOEFL 型のテストに慣れない生徒がまだ多い中、受験すること自体がよい経験となっている。特に、国内中学校出身者（一般生）にとり、ITP のレベル 1 を受験することはチャレンジであるが、今後の伸びしろを意識するよう指導している。3 年生で TOEFL を全員に受験させることは実現できていないが、TOEFL iBT を在籍 3 年間のあいだに受験している生徒は 66 名（平成 30 年度 3 年生、265 名中）におよび、うち 62 名が CEFR の B2 レベル（79 以上）を取得している。海外進学・留学や大学受験の際の帰国生徒入試等で利用されている。【資料 p.87～】

### （3） Global Leaders Boot Camp

課題解決学習の訓練をする Global Leaders Boot Camp を、八王子セミナーハウスにて毎年度 2 回実施している。「リーダーシップとは何か、そしてグローバルとは」、参加者はリサーチ、ディスカッションとプレゼンテーションをくりかえしながら、ファイナルプレゼンテーションへと進んでいく。3 日間の厳しい体験となるにもかかわらず、参加希望者が年々増え、本年度は合計 39 名の参加者を迎えた。さらに若手の教員（今年度のべ 9 名）が希望してキャンプに加わり貴重な経験をしている。教員の中に SGH のめざす方向性が受け入れられ、広がりつつあることの証左である。【資料 p.79～】

### （4）主体的・対話的で深い学び

教科学習の中で行われている主体的・対話的で深い学びや探究型の学習についてまとめた一覧表を平成 28 年度から作成している。今年度も、各教科から 1 年生 30、2 年生 37、3 年生 39 の特色ある授業の取組が報告さえている。各教科、各教員が世界中から集う帰国生徒とともに授業や

学びを構築する上で工夫を重ねてきた多くの授業実践は、SGH が指向する学びや人間形成の基盤である。これらが校内でますます共有され、本校の共有財産となるよう今後も調査・共有を積み重ねていくとともに、より明確に本校グローバル教育が目指すべき資質形成の関連付けを図りたい。これらの授業実践を互いに評価し合い、授業を質的に向上させることで、SGH 終了後もグローバル市民育成をさらに推進することとする。目標となる人間像や学力観、育成すべき資質能力などを常に議論しながら、教員が相互に学びあう学校文化を大切に育んでいきたい。なお、この点は中間評価における指摘「学校内での取組や通常の授業との連携などについて改善が望まれる」に対する改善取組であることを付言する。〔資料 p.99～〕

## （５）キリスト教週間行事「マルチイベント」

6月のキリスト教週間の行事「マルチイベント」では、20企画に分かれて全校生徒がレクチャーやワークショップを経験する機会がある。大学教授や研究者、専門家や芸術家の生き方や仕事に直接触れ刺激を受ける、SGH にふさわしい企画が含まれている。以下に、SGH または「多文化共生」に強く関連するテーマを列挙する。

イベントは本校教員がそれぞれ関心のある分野から、生徒が生命や人生、社会のあり方を考えるのにふさわしい企画として提案したものであり、グローバルな問題が多くみられるところは、本校教員と生徒の関心の高さをあらわすものである。〔資料 p.12～〕

- 1) 世界の子供たちの「今を守る」「希望を創る」教育支援～ワールド・ビジョン
- 2) 食べものと命～共に生きるために by アジア学院
- 3) 国連機関で働く面白さとやりがい
- 4) 「少数民族の言語を研究する」～マリ語とその文化、それを取り巻く社会について～
- 5) 死刑制度を考える
- 6) ホームヘルパーの現場から～介護の世界を、のぞいてみませんか？～
- 7) GOSPEL WORKSHOP など

マルチイベント「国際機関で働くおもしろさとやりがい」について、元国連職員4名の方々に国連で働くことについて、具体的な体験談、国連の目指す平和などについてお話いただいた。48名の生徒が参加し、お話しを伺った後、生徒2名が司会者となり、パネルディスカッションとなった。参加した生徒の感想によれば、「国連で働くということが必ずしも遠いことではないということを知った。世界各国から集まった人々の多様な意見をマネジメントすることで究極の「世界平和」を実現するという仕事にさらに興味が湧いた。」「常にプランBを考えて、diversityの中で働かなければいけない。いつ何がおこるかわからない。明日、暴動がどこかで起きるかもしれない。このように、高いリスクの中で働くことはストレスも多いと思いますが、とても変化のある、やりがいのある仕事のように思います。まだ将来のことはわかりませんが、コミュニケーション能力を磨くことは国連関係で働く場合、必要不可欠だと学びました。そして、一番大切なことは、人として信頼できるか、判断能力を磨くことだと学びました。だから今の私にできることは、海外生活を通じて取得した英語力を磨き続けること、そして、今のうちに様々な経験を自ら積み、自分で考える力、思考力を高めることだと思います。」

自身の近未来の目標として、国際機関で働くということが射程内にあるという確信と、そのために必要な資質形成への気づきがなされたイベントとなった。

## (6) その他のプログラム

平成31年1,2月にかけて3年生対象に、国際基督教大学教養学部の実際の講義を聴講する高大連携の企画があり、19講座にのべ147名が参加し、高度な講義内容を十分に理解できないまでも学習への大きな刺激となった。国際基督教大学が掲げるリベラルアーツ教育とは、理系の研究も包含されて成立するので、数学科は夏の数学ツアーや数学セミナーを開催している。これらは大学教員や専門研究機関に指導を受ける企画である。【資料 p.26～】

このようにSGH講演会に加えて自主的に学ぶ機会を多く設けることで、生徒の高いレベルの学びをめざしている。

平成31年2月20日には、生徒会主催により生徒が異文化に触れる機会としてインターナショナルデイの催しを開いた。本年度は文化紹介やスタディツアー報告のブース展示を生徒らが自主的に開いた。またエチオピア・スタディツアーに向けて、現地訪問先の紹介と、交流や支援用物資調達のためのクッキーセールが参加予定生徒により行われた。

さまざまな国際交流の機会も、SGH関連として理解され校内で開催しやすくなり機会が増えた。インターナショナルデイも生徒からの要望で始まった行事であり、帰国生徒が多数いる学校ならではのグローバルな企画である。グローバルな関心の持ち方を生徒自身が会得しつつあることを示唆している。

## 2. SGH課題研究講座およびSGH学習発表会【資料 p.28～】

### (1) SGH 課題研究講座

昨年度から、課題研究講座はJICA（独立行政法人 国際協力機構）との協力講座として開講することとなった。本講座の掲げる「多文化共生を目指す社会貢献」というテーマが、JICAの掲げる国際協力における「グローバル人材の育成」「地域パートナーシップの発掘」などの目標と重なる点を見出したことから、協力関係構築の実現に至った。今年度は、JICA職員をSGH講演会に迎え、また元JICA研修生のお話しを本講座で伺うことができた。さらに夏休みには、30名の生徒が外務省を訪問し、外交政策局審議官による講演を伺うことができた。本講座履修生の一部が、12月15日に開催された2018年度SGH全国高校生フォーラムに出場した。

研究開発単位のB「学際的課題研究講座の新設」について；SGH課題研究講座は当初予定を前倒して平成27年度から3年生の選択授業として設け、本年度は53名が受講した。これは昨年度の38名に比して大きな増加である。履修者は、リサーチやプレゼンテーションの技法を、SGH教育顧問として招聘した東京学芸大学Datta Shammi准教授にご指導いただいた。年度の後半は、リサーチ・プレゼンテーションと「会いたいプロジェクト」へと履修生の学びは収斂していった。「会いたいプロジェクト」においては履修生の情熱により、作家の重松清さん、フォトグラファーの齋藤健寿さんの講演会を実施することができた。

### 【評価】

学校主導で特定の課題を設定してカリキュラムを編成するという方向性は、本校の多様な価値

観、多様な問題意識を持つ生徒らの学びにそぐわないとの判断から、3年生の「自由選択講座」（2単位）という位置付けで実施してきた。多角的な視点から独自の問題設定を行う力、その問題関心に対して外部への働きかけも含めて積極的に探究していく力、意欲を持って学びの成果を発信していく力など、ICU 高校生の独自の潜在能力が強く発揮された。

課題研究講座は2年生3学期の先行授業から始めて、「多文化共生を目指す社会貢献」について本校教員および大学教員をはじめとする講師の指導により、英語による講義を交えて十分な学習ができた。つづいてグループ学習として取り組むべき「問い」、リサーチ・クエスチョンを見つけ、自主的にリサーチをしてそれぞれのテーマを深めた。9本のグループリサーチ研究報告の発表を受けて、相互評価により学習発表会（全校）での5本の発表が決定した。学習発表会のプレゼンテーションとまとめの提出をもって成果とした。まとめは得意とする言語で提出させたので英文、和文が混じっている。それぞれのグループごとの課題に対する取り組みは十分なものであった。生徒がそれぞれの視点で多文化共生について学び考えをまとめることができ、課題研究講座の目標は達成できた。

ただし、3年生の後半は大学進学のための準備が迫っている生徒には十分な時間をとることは難しいため、長文の論文提出を要求することは控えた。学習成果の集約と発信が継続的な課題である。

なお課題研究講座の運営指導体制については、昨年度から責任を本校教諭（地歴公民）にゆだね、さらに東京学芸大学准教授を教育顧問として招聘する体制を整えた。これにより生徒の深い学びを支える十全な校内体制が整備されたと考える。これらは、中間評価で改善を指摘された点「外部のリソースに依存する傾向も強くみられる」への改善取組であることも付言する。

## （2）SGH 学習発表会

SGH最終年となる今年度も、さらに生徒相互の学びあいによって大きな実りを実現することができた。11月28日（水）、学年や帰国生／一般生の別ををこえたまさに「多様性の中の学び合い」が、この日の校内いたるところでくりひろげられた。

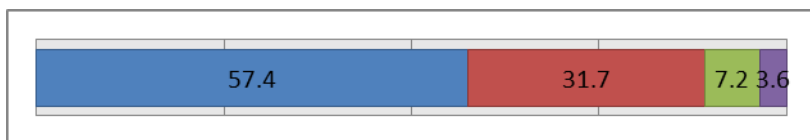
Part 1として体育館で行われた全体発表会では、「SGH課題研究講座」を履修している53名の生徒が、同級生また後輩に、力のこもったメッセージを発信した。ディスカッションによって課題を発見し、行動力をともなうリサーチによりさらに課題を掘り下げ、聴き手の理解や共感に寄り添ったプレゼンテーションを展開してくれた。全校生徒762名の集中も高く、会場である体育館には深い共感と共有の時間が流れた。

その後、Part 2として各教室に分かれてプログラムごとのプレゼンテーションを30分2コマで展開した。世界各地を訪ね多くを学んだスタディツアー、学校内外のプログラムへの参加、さらに卒業生やICU（大学）等で学ぶ留学生によるプレゼンテーションもあり、多様な世界のゆたかさとICU高校生徒のエネルギーが交錯するひとときとなった。〔資料p.45～〕

### 【学年末 SGH アンケート集計結果（全学年）】

「グローバルな問題をグループで考えることができて良かった」

そう思う 57.4%+ややそう思う 31.7%=89.1%



【評価】

生徒から生徒が学ぶ、生徒が互いに学びあうという本校 SGH のめざすスタイルが実現できた。豊かな海外経験を持つ生徒、多様な個性を持つ生徒、高いポテンシャルで友人に発信することに喜びを持つ生徒、SGH プログラムで国内外での学びを体験した生徒らが、互いにそれぞれの経験と学びを交流させる一日となった。まさに、学校の教育プログラム全体が活性化された一日であった。少人数でプレゼンテーションを聞き、質疑応答を重ね、意見を交換することで、それぞれの意欲や経験の共有と深化が図られた。海外経験や課題研究講座履修の有無による学びの深まりの差が、このような取り組みにより小さなものとなっていき、グローバルリーダー育成という課題がより広範に達成できることを期待している。

特に、学外における生徒の自主的活動に関するプレゼンテーションは特筆に値するものであった。World Scholar's Cup に自分たちで参加した生徒らのポテンシャル、個人参加スタディツアーで海外へ飛び出した生徒のチャレンジ、キャリア甲子園 2017 で発揮された豊かな創造性、さらに自身の学外での活動の経験を分かち合うことで「インスパイアリングな友達に会うことができる」「自分から動き一歩になれば」と願う「how to 課外活動」など、どれも目を見はるものばかりで、語る生徒も、聞き質問する生徒も、充実感を覚えた一日であった。

「学年末 SGH アンケート」の自由記述欄に記されたコメントのひとつには、「様々な興味深い発表に耳を傾け、自分の知的好奇心と探究心が動かされた。自ら課題を見つけ、それを追求める姿勢に憧れを抱いた。今日の経験はとても有意義で、人生の 1 ページになった。今度は誰かに問題への対応策を研究することのたのしさを伝える立場になりたいと強く思いました。」とある。

共同の深い学びが実現した一日であり、多くの刺激をこの先のそれぞれの学びと歩みに活かして行ってほしいと願う。個人としての資質形成にとどまらず、経験を共に学ぶ仲間と共有したいという思いは、よりよき世界をめざす情熱として今後も大切に育みたい。

なお、SGH 学習発表会の企画と運営は、「SGH プロジェクトチーム」により進められた。このチームは、校長、副校長、教頭、事務長、教務部長、進路部長、キリスト教活動委員長、司書教諭、ライティングセンター担当教諭、各教科代表で組織されている。また、当日についても、全校教員が第二部のそれぞれのプレゼンテーションに二名ずつつき、生徒のプレゼンテーション内容や構成へのアドバイス、機材使用のサポートなどを行った。全校教員が一丸となって生徒の学びを支援することで成功させた学習発表会であった。

SGH 学習発表会は、校務組織上のさまざまな教員の協同によって担われ、当日も全校あげでのプロジェクトとなり、結果として教員集団のグローバル教育展開に必要な資質形成の契機となっている。この点は、中間評価における指摘「学校内での取組や通常の授業との連携などについて改善が望まれる」への改善取組でもあることを付言する。今後もさらにグローバル教育を推進するチームを結成し、リーダーとなる教員の力量を形成しつつ、チームにおける企画立案を中心に、教員会議での周知・合意形成をもって全校での取組を充実させる。

3. スタディツアー [資料 p.57～]

今年度は、SGH 事業による課題研究スタディツアーおよび SGH 関連のツアーあわせて 7 つのプログラムが実施された。参加生徒はのべ 86 名、引率教員はのべ 16 名におよぶ。参加生徒の感想文に見られるように、SGH 学習発表会における前年の参加者のプレゼンテーションを聞いて、参加を決意するものも少なからずおり、本校内の SGH 関連のプログラムが生徒の中で有機的に関連づけられていることがわかる。

ベトナムとエチオピアへのスタディツアーは、課題研究に即した意義のある旅行となり、生徒の感想文には若い感性が異文化に出会った衝撃が現れている。参加した生徒にとっては、同世代の高校生との交流が最も印象深かったようである。ベトナムのグエンフエ高校、エチオピアのコケベ高校における交流を一番の思い出としてあげる参加生徒が多い。ベトナム戦争の傷跡を残すフエで、多文化・他民族共生の壮大な試みを展開するアディスアベバで、生徒が聞き、語り、わかちあったことばは、両国の若者の心の中の礎となることであろう。

なお、平成 30 年 3 月に実施予定であったエチオピア・スタディツアーは、2 月に同国において非常事態宣言が発令されたことにより治安情勢悪化の懸念から実施中止という判断に至った。前年秋より参加者は JICA 東京の支援も得て、エチオピアやアフリカに関する学びを深めてきただけに残念である。代替となる宿泊行事を至急計画して、学びのまとめとアディスアベバで交流予定であったコケベ高校の生徒に向けたメッセージを発信し、参加者の交わりはいったん解散した。しかし一年後、平成 31 年 3 月のツアーに思いを託したい前年のメンバーが再び集い、事前学習会に参加し、クッキーセールへの協力などで支援や交流のための物資を調達し、校内で全校生徒に物資の提供を呼びかけるなど主導的な役割を果たした。

以下は、今年度エチオピア・スタディツアーにおいて Meseret Ediget Primary School 訪問へ向け、現地で活動する青年海外協力隊員に JICA エチオピア事務所を通じて送った本校教員のメールの一部である。

「近年、日本とアフリカとは経済的にもますますつながりが強くなっています。しかし、日本では地理的にも、文化的にも、心理的にもどこか「距離」を抱いてしまう現実があります。また同時に、現在のグローバル化された情報社会では、誰かによって切り取られた「アフリカ」を知る機会は本当にたくさんあります。しかし、自分たちの肌感覚としてアフリカの日常を実感する機会は少ないと感じていました。

そこで私たち ICU 高校では、実際にアフリカを訪問し、そこに暮らす人々に直接出会い、わずかな時間であっても現地の人と同じ視線で一つの経験を共有する機会を作りたいと考えました。そうすることで、自分たちの日常を相対化し、また文化的な違いの中にも共有できる「何か」を自分で見出すことができるのではないかと考えました。

観光目的のツアーで現地を訪問するだけでも、多くのものと出会うチャンスは十分にあると思います。しかし、私たちの本来的な主旨として、多文化共生、日常世界の拡張、共感的体験などを大切にしたいとの思いがあり、観光だけの旅行で終わらないツアーを企画・実施してきました。

高校生にとって、エチオピアの産業や経済的な日本とのつながりを知ることも重要なことだと思います。しかし、彼らの日々の日常は「学校で過ごす毎日」であり、当然ながら高校生の関心の多くが、エチオピアの学校教育に関することでした。

自分たちの日々の学校での学びを、エチオピアの子供たちと共に行うことで、等身大でエチオピアの子供たちと出会うことができるのではないかと考えました。



そのような想いから、授業参観・授業見学という形ではなく（実際には、ほぼそのような形になるのかもしれませんが）、一緒に机を並べて一緒に授業を受ける機会を持つことができればと願い、協力隊員の方の力をお借りしてきました。

エチオピアの生徒と同じ視線で同じ景色を見ることで、日々の自分たちの日常をエチオピアで追体験することができます。そしてそこから日本での自分たちの日常を再構築する機会になればと思っております。ゆえに、小学校低・中学年の授業はアムハラ語で行われ、そこに参加する本校生徒は言葉が理解できないかもしれませんが、そのショック（ワケのわからなさ）自体が大きな経験であると思いますし、とにもかくにも、生徒と同じ机で時間を共有するというところに大きな大きな意味があると考えています。」

このようなねらいをもって行われたスタディツアーで、参加生徒は豊かな出会いと大きな衝撃とを与えられたことと思う。世界や事象を複眼的、重層的に見るための新しい「視線」を、学校生活という「日常」において与えられた経験は、参加生徒がグローバル市民として世界の人のびとと共に未来を生きていく上で必要な資質形成であると考えている。

ベトナムスタディツアーは、本校企画であり、アジアの文化や生活を、ストリートチルドレン施設、現地高校生との交流、少数民族との交流、ベトナム戦争の遺跡見学などを通じて体験した。

コロンビア大学スタディツアーは、本校が監修、NYにある日本ICU財団（JICUF）協力、米国名門大学で「アントレプレナーシップ」をテーマに、米国のアクティブラーニングを体験し、大学教育の実際、知的に高度な英語にふれる体験を提供してくれた。

ハワイのプナホウ高校で行われる Student Global Leadership Institute（SGLI）は、グローバルリーダー育成プログラムである。本校から毎年3名の参加が許されている。SGH事業開始に先んじて参加していたが、課題研究学習の典型的なプログラムであり、大いに参考となる。このプログラム参加には、ネイティブ並みの高い英語力が要求される。副次的な効果として、海外大学進学を視野に入れている生徒がこれまで以上に具体的なイメージを持つことができるようになったという点があげられる。

参加した生徒の感想文には、「このプログラムは私に、よき市民またリーダーになるために必要なスキルを深く根付かせたのと同時に、私が何者でありどのような人間になりたいかということを理解させてくれた」と記されている。SGHのプログラムが、グローバル市民育成というねらいをこえて、自己理解や人間理解にいたるものであることを示すものである。

SGLIには、あわせて引率教員に対する研修プログラムがあり、そのつながりから生まれた企画が、本校生徒も参加しているGlobe Cinema（数カ国の高校生がショートムービーを披露しあう）が企画された。これは、本校ホームページ上で閲覧できる。今年度は、本校からの引率教員とは別に、本校の英語科のDavis教諭が教員研修のFacilitatorとして招聘された。

栃木県那須塩原にあるアジア学院へのスタディツアーは、本校とアジア学院の提携企画である。ベトナムからの帰国生がアジア、アフリカ、太平洋諸国の農村指導者の方々との英語による交流に、多文化共生の一步目を感じたと感想文に記している。「誰もが自分の個性を表現しながら、様々な意見交換をし学び合い、お互いの違いを尊敬しながら過ごして行ける環境がグローバルなのではないか」という気づきは、自身の海外経験や語学力を絶対視することなく、アジアやアフリカ、また仲間から学び、人びととのつながりの中でグローバル社会のありようを模索する姿勢に注目したい。若い日の出会いが、一人ひとりのグローバルな世界における活躍の出発点となること、またたえず自己をつくりかえていく最初の一步となるであろうと考える。

Global Leaders Boot Camp（問題解決セミナー）には、若手の教員が希望して引率・参加している。参加生徒とともにグローバルリーダーに必要な資質形成を模索する経験は、校内の授業はじめ諸活動に活かされるものであると同時に、教員の中に SGH のめざす方向が受け入れられていることのあらわれであるといえよう。この点は、中間評価において改善を指摘された点「外部のリソースに依存する傾向も強くみられる」に対する改善取組であるともいえる。

オーストラリア学校体験入学&ホームステイプログラムは、ホームステイ体験中心のツアーである。参加生徒の感想文には、「さまざまな人種、宗教、ジェンダー、家族の事情、障がい者など」の状況を生きるオーストラリアの多文化共生にふれた感想がつつられている。

#### 【評価】

SGH 事業実施以前は、帰国生受け入れの専門校であることからかえって海外での体験を含むプログラムの必要性への疑問もあり、このようなプログラムの導入には消極的であった。しかし、国内生、帰国生共にグローバルな体験への興味・関心は強く、これによりもたらされる学びのポテンシャルが大きいことが証明された。同じグローバル体験を、多様なバックグラウンドの生徒が共に参加して学び合うこと、国内外また学校外の生徒との学び合いの意義も大きいことが認識された。

どのツアーも、SGH 研究開発課題である「多文化共生」を考える動機付けとなる異文化体験をふくみ、自らが直接体験することによるインパクトが大きいものであることは、生徒感想文やまとめを見ると明らかである。異民族・異文化・異言語にふれ、現地の高校生と交流することで大いに刺激され、自己変革をせまられる経験となった。さらに、その経験を SGH 学習発表会などの機会に他の生徒らと共有することで、一人ひとりの中で深くくりかえし追体験されたことと考える。

なお、スタディツアー参加者の国内一般生徒と帰国生徒の割合を確認すると、ツアーにより傾向の違いはあるが、全体としては 26 名対 38 名と本校における両者の比率と比例していることから、国内一般生徒も SGH 事業を通じて帰国生徒同様にグローバルな関心を強め、また経験や学びを深めたと評価できる。

なお、スタディツアー引率者決定は校長の指示ではなく、教員の自発的申し出によっている。引率を引き受けた教員は、すでに全専任教員の半数近くへのぼり教員の積極的な取組を示している。多くの教員が国内外のスタディツアー引率を担うことで、事前学習における学びのコーディネート、現地における交流の促し、事後のふりかえりの指導など、自身の経験に加えて、グローバル教育を担う教員としての資質を育てる契機としている。この点は、中間評価における指摘「学校内での取組や通常の授業との連携などについて改善が望まれる」に対する改善取組である。

## 4. 卒業生の協力：グローバルスタディネットワークの設立

グローバルネットワークの設立を SGH 事業を支えるものとして計画した。卒業生に対して本校ホームページ、同窓会を経由して協力を呼びかけ、海外学校説明会のおりにも協力を依頼した。今年度は SGH 講演会講師のうち 1 名が卒業生保護者であり、帰国生の父として経験もふまえてお話しいただいた。海外説明会などで卒業生の支援を得ていることも多くあり、国際的な分野で卒業生が活躍していることがわかる。

本校学校案内には毎年、「世界で活躍する卒業生」といページを設け、卒業生を紹介している。2020年版には、タイ、ジャカルタ、アメリカ合衆国などで活躍する4名の卒業生に寄稿いただいた。本校HPの「Graduates' Voice!」のメッセージ・コラムとリンクさせているので、広く生徒に周知し、身近なモデルとして示したい。

SGH事業をうけて結成された卒業生を中心とした教育関係者の会「教え人フォーラム」は以下の通り実施された。

●第6回 7月8日(日) 13:00~16:30

小正理文さん「アフリカ、日本、特別支援、STEM、フィンランド、の教育から見える未来」  
宮平大輔さん「言語喪失について」

●第7回 12月23日(日)13:00~17:00「教育の今とこれから」

小正理文さん (Sky Sea International Academy 代表)

「新たな教育のあり方 -Manai Institute of Science and Technology-」

仲島ひとみさん (ICU 高校教諭) 「論理学入門マンガ『それゆけ! 論理さん』」

高橋麻里さん (都立高校教諭) 「EFLにおける動機づけの実践研究」

星友啓さん (スタンフォード大学教員) 「教育の近未来地図」

【評価】

国際的な分野で活躍している本校の卒業生は多いので、そのいわば人的資源を活用することがねらいであったが、多くの卒業生の関心と協力に恵まれた。SGH講演会についてもさまざまな分野の講師を招くことができた。また、卒業生の紹介で多くの企画が持ち込まれる機会も多くなった。さらに、今年度は在校生保護者の紹介により、ハーバードビジネススクール竹内教授の講演会も実施できた。

卒業生をはじめとするICUHSネットワークの構築は、SGHの大きな成果であり財産である。今後このネットワークを単に講演やワークショップという単発の機会ですら終わらせず、共同プロジェクトの開発や、生徒のリサーチ支援などにおいて活用していくことを検討したい。

特筆すべきは「教え人フォーラム」である。これは卒業生の提案企画で、本校教員との協力のもと7回の研究会を持つことができた。本校には従来独自の研究会はなかったので、学校の変化の一步といってもよいであろう。

## 5. 課題研究以外の研究開発 校内の取り組み

課題研究以外の研究開発としてA、B2点をあげているが、さらにC；校内における探究的な学習の取り組みとD；ICTの活用があげられる。A、Cについては既述したので、ここではB、Dを報告する。

### B；ライティングセンターによる文章作成支援

「自立した書き手を育てる」ために設けられたライティングセンターでは、引き続き文章作成の支援をした。今年度の生徒利用数(のべ人数)は162名であった。本校卒業生(大学生・大学

院生) のチューター10名が在籍し、日英の両言語にてセッションを行っている。本校のライティングセンターは高校としては先進的な試みとして注目されている。

## D ; ICTの活用

SGH事業がめざしているグローバルリーダーの育成プログラム展開のためには、一方で本校のICT環境のレベルアップが必要となる。教員がこれに取り組む中で思わぬ成果を生んできた。今年度は、以下の取り組みを特記する。

### ●ネットセキュリティ授業 [資料 p.100～]

本校3年生が、「情報」授業の中で(株)トレンドマイクロ社による講義を受け、さらに希望者が同社を訪問し、システム開発技術者や国際機関と連携する部署の社員の話しを伺った上で、1年生「家庭」授業の中で、「セキュリティとモラル」をテーマにプレゼンテーションとワークショップを行った。

1年生にとってわかりやすいよい機会であったばかりでなく、教える側にたった3年生生徒にとっても、また生徒たちが自分たちで企画を進めることができるよう指導に当たった本校教員にも今後につながるよい機会であった。「情報」「家庭」「国語」の教員が、教科横断的に授業づくりを共同で行ったことも成果のひとつである。本校らしさが発揮できた。

グローバルな活躍をしていくためにもICTの活用は必須である。ICTの活用により、自身の学びの経験を後輩に還元することを目指すこの企画は、自分の学びを発信・共有でき、学びに主体的に関わり、他者にも主体的、対話的で深い学びの機会を提供できるという意味でSGH事業の延長上にある成果と評価できる。大学進学先の決定した上級生が後輩である下級生に教えるという新しい学習のモデルづくりもできた。

## 6. SGHだより [資料 p.102～]

スーパーグローバルハイスクール事業の目的、さまざまなプログラムについて生徒に周知し活発な参加を促すために、「SGHだより」を8回発行した。生徒がSGH事業を理解し、より積極的に学びを進めるために欠かせないはたらきをしている。

## 7. アンケート [資料 p.101～]

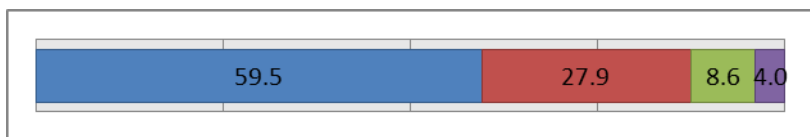
11月に、全校生徒を対象にアンケートによりSGH事業に対する生徒の意識を調査した(Web実施、580通回収)。主な結果を以下に挙げる。

- ・「異なる文化との出会いは楽しいと思う」

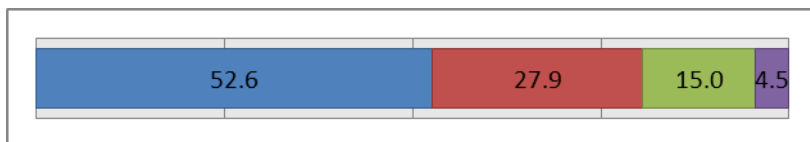
「そう思う」+「ややそう思う」合計、( )は昨年度の調査結果  
96.2% (92.2%)



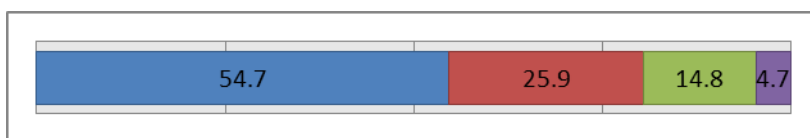
- ・「海外のこと、国際関係のことについて関心を持つようになった」 87.4% (83.1%)



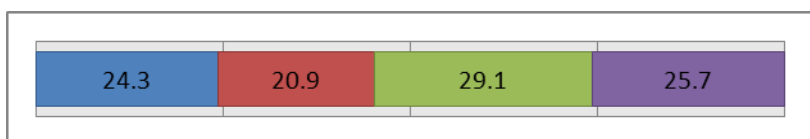
- ・「将来は国際的なことに係わる分野で活躍したいと思うようになった」 80.5% (74.1%)



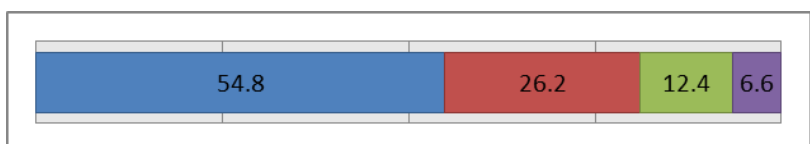
- ・「いつかは海外に滞在して仕事をしてみたいと思う」 80.6% (77.7%)



- ・「海外の大学に進学したいと思うようになった」 45.2% (41.1%)



- ・「大学に入学してからでも、海外留学をしたいと思うようになった」 81.0% (74.4%)



以上の通り、最も肯定的な回答が高い割合であられた調査項目は、「異文化との出会いは楽しい」96.2%であった。これは、われわれの予測をはるかに上回る高い数値であった。「楽しい」という前向きな気持ちを高めつつ、学びを深め、実践へと広げる、多文化共生実現に向けたサイクルを教育活動のなかに組み込む礎として、この回答を大切に考えたい。

また「SGHの企画、行事は自分にとって意味があると思う」については、昨年度のアンケートでは、1年生76.4%、2年生70.4%であったが、今年度の結果は1年生97.9%、2年生と86.0%と上昇した。本校SGHプログラムの成熟と学校の教科授業の連動、加えて生徒相互の学びあいがこの高評価に結びついていると分析する。スタディツアー参加者や課題研究講座履修者は、全校生徒のうちの一部にとどまるが、立体的・複合的なプログラム展開により、本校SGHが広く生徒に自身の成長の機会として大きく評価されていると考えてよい結果といえる。

さらに、「国際的分野での活躍」や「海外滞在し勤務」や「国際機関での勤務」などに強い意

欲を持つ生徒が育っていることも確認できた。他方、「海外大学への進学」については、肯定的な回答が45.2%にとどまるが、これは本校が帰国生徒受け入れ校として日本の教育システムへの適応を主眼とする学校である点に加えて、海外での学習経験を有する生徒が、海外進学の厳しさを実感しているところからくる回答として了解できる。

ただし、「大学入学後の海外留学」については、81.0%が肯定的な回答を行っている。この差は、生徒がきわめて現実的に海外での留学を志向していることのあらわれであると分析できる。

本校では、海外帰国生徒の受け入れ教育に専念してきて、SGH 事業開始以前はグローバル社会への貢献や海外への発信について、優先度が置かれていないくらいがあったが、SGH 事業を契機に生徒も教員もより積極的にグローバル社会に関わって発信するようになり、SGH 事業の実施が本校に大きな変容をもたらす結果となったと考えている。

今年度11月に教員を対象に実施したアンケート（34名回答）では、「5年間のSGHによりどのような変化があったと思いますか」という設問に対して、「生徒達の学習機会の拡大」、「生徒達の問題関心・意欲の変化」、「卒業生とのネットワークの形成」、「大学をはじめ、外部機関との連携強化」「広報における効果」などが多く回答された。

具体的な記述としては「SGH発表会での先輩や同級生の発表から刺激を受け、自分も何か行動を起こしたいと考える生徒が増えたように思う。担任をしていて、外部機関が行っているスタディツアーや留学について相談や問合せを受けることが増えた。」、「いくつかの会社や団体と積極的に教育について議論し成果物を協働で作ることができました。とてもよい経験です。」などがある。

SGH による生徒の変容、また教員の成長を今後も持続させるためのカリキュラムやプログラムを構築していく。特に教員については、帰国生徒受け入れ教育に専心してきたわれわれが、SGH を契機に新たな教育課題に出会い、方途を模索する途上にあるといえよう。

## 8. 成果の普及と発信

(1) 本校は100%内部進学 of 付属校ではなく、3分の2は一般入試などで大学進学をめざすいわば普通の高校である。本校の取り組みは大学受験のために時間を確保しにくい他の平均的な普通高校でも適用できるものであるので、よい成果を得られたことについてはこれまで以上に成果の普及をめざしたい。

(2) バイリンガルで実施された課題研究講座やその発表会のように、帰国生徒の体験、外国語力を活かす取り組みができた。帰国生徒の持つ潜在力がさらに発揮されるような取り組みを、本校のプログラムの中で開発し普及に努めたい。帰国生徒受け入れの専門校として、学校説明会などの場面や世界各地の日本人学校との関係の中で、帰国生徒の特性を活かす取り組みを発信していきたい。

(3) 華やかな印象を持つ国際機関や途上国支援の現場での勤務は、精神的・肉体的にもハードなものであることを、SGH 講演会やマルチイベントなどを通じて感じ取った生徒も多かった。多少の努力や善意だけでは追いつかない高みにある目標に対しても、臆せず挑戦するたくましい精神を持ったグローバルリーダーを育てるための教育はいかにあるべきか、本校の使命である「平和への貢献」の実現とあわせてこれからも検討を続ける。

## 【参考】本校専任教員による研究発表・論文など

鵜飼力也 研究会発表「仕掛ける授業ー学びの3要素を育むー」国際基督教大学第41回教育セミナー 2018年8月3日

鵜飼力也 研究レポート「18歳選挙権への挑戦ー3つの「ズレ」と対話するー」国際基督教大学教育セミナー40周年記念誌 2018年8月1日

鵜飼力也 研究会発表「創造的な探究のためのパターン・ランゲージ活用：探究学習の振り返りを通して、深い学びを促進する」慶應義塾大学 SFC Open Research Forum 2018 2018年11月23日

大森由季子 発表「高等学校のライティングセンターにおけるチューターの役割」第9回アジアライティングセンターシンポジウム 2017年3月6日

高柳昌久 講演「中島飛行機三鷹研究所とジェットエンジン部品の『発見』」ICUアジア文化研究所・ICU平和研究所・独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所共催シンポジウム「“ここ”の歴史へー幻のジェットエンジン、語る」 2018年6月2日

高柳昌久 講演「中島飛行機三鷹研究所・武蔵製作所から何を学ぶか？」武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会主催講演会「武蔵野の空襲と戦争遺跡から何を学ぶか？中島飛行機に関連した遺跡・空襲とその体験を中心に」 2018年8月12日

高柳昌久 講演「中島飛行機三鷹研究所の調査を通して出会ったもの」大宮郷土史研究会主催講演会 2018年9月2日

高柳昌久 講演「現ICU構内にも爆弾が落ちた？」ICUアジア文化研究所主催第177回アジアフォーラム「アジア太平洋戦争中にICUにも爆弾が落ちた？ 1945年4月の夜間空襲について」 2019年2月14日

高柳昌久 「ICUでのジェットエンジン部品『発見』とその意義」独立行政法人 国立文化財機構東京文化財研究所 保存科学研究センター 近代文化遺産研究室編『国際基督教大学所蔵ジェットエンジン部品に関する調査報告書』ICUアジア文化研究所 2018年3月31日

高柳昌久 発表「教材案 日本本土・日本軍への朝鮮人動員」日韓国際シンポジウム 2018年1月6～7日 釜山・2019年1月5～6日 那覇)

高柳昌久 「教材案 日本本土・日本軍への朝鮮人動員」『日韓共通教材案No.6』2017年1月7日、『日韓共通教材案No.7』2018年1月6日、『日韓共通教材案No.8』2019年1月5日

仲島ひとみ「Dialogue and Students' Writing Development」7th Symposium on Writing Centers in Asia (於 東京国際大学), The Writing Centers Association of Japan, 2015年3月7日

仲島ひとみ 『大人のための学習マンガ それゆけ！論理さん』筑摩書房 2018年10月25日

仲島ひとみ 発表「書き手を育てる対話」静岡大学教育学部附属島田中学校教育研究発表会 2018年11月1日

仲島ひとみ「それゆけ！論理さん～国語科と論理の学び」学校図書館の学び講座 vol.1 筑波大学附属小学校学校図書館学びの会 2019年2月24日

Michael Ellis [Promoting gender diversity in the classroom through drag], JALT Postconference Publication - Issue 2018.1, August 2019

Michael Ellis [Exploring the roles that SIGs play in teacher development: Three interviews], PanSIG 2018 Journal, March 2019 (co-authored with Matthew Turner and Amanda

Yoshida)

Michael Ellis [Collaborative teacher observations: A case study], JALT Postconference Publication - Issue 2016.1, August 2017

Michael Ellis [Reading for speed and breadth: TR and ER], JALT Postconference Publication - Issue 2015.1, August 2016

Michael Ellis [Metalanguage as a component of the communicative classroom], Accents Asia - Issue 8.2, April 2016

Michael Ellis Presentations [International exchange through Google sites], Tokyo JALT State of the Chapter, July 7\*\*received the "Best of JALT" award

Michael Ellis Presentations [Project based learning across the Pacific], JALT2014, November 22

Roderick Davis Facilitator of Global Education Teacher' s Program; Punahou School, Honolulu. July 2018.

Roderick Davis "The Globe Cinema: Students as Producers" Global Education Teacher' s Program; Punahou School, Honolulu July 24th, 2018.

以 上